



彩り鮮やかな衣装に身を包んだお稚児さんたち
ちよつぱり緊張した面持ちでお寺の前で記念撮影



復刊第一号
2007年11月
身延別院発行
〒103-0001
東京都中央区
日本橋小伝馬町3-2
Tel 03-3661-3996
Fax 03-3663-2766



二十年ぶりに稚児行列

身延別院のお会式が十一月三日に開かれました。今年のお会式には二十年ぶりにお稚児さん行列が復活、法要に参列した約百人の檀信徒が日蓮聖人のご遺徳をしのびました。

お会式とは一般に法会の儀式のことを言いますが、特に日蓮聖人のご命日(十月十三日)に行われる法会のことを言います。総本山身延山久遠寺や大本山池上本門寺のお会式が有名ですが、全国の日蓮宗寺院で営まれます。地域によって旧暦や一月遅れだったり、お寺によっては互いに日時を譲り合って檀信徒や僧侶同士の便宜を図ったりしています。身延別院では毎年、十一月三日にお会式の法要を営んでいます。今年は日蓮聖人の七百二十六回目のご命日でした。

身延別院では地域にいつそう親しまれ、だれにでも開かれたお寺を目指して、今年、二十年ぶりにお稚児さん行列を復活させました。檀信徒の子どもさん、お孫さんなど十四人がお稚児さんとして参加しました。お稚児さんたちは、彩りも鮮やかな衣装に身を包み、お寺を出発。小伝馬町交差点から本町三丁目交差点へ、そしてお寺まで約八百メートルの道のりを、お題目と団扇太鼓の音に合わせて練り歩きました。

このあと、本堂でお会式法要が営まれました。参列した檀信徒の皆さんはお稚児さんたちと共にご祈禱を受け、子どもさん、お孫さんたちの健やかな成長を願いました。

『願満』復刊にあたって

住職 藤井 教公

このたび寺報『願満』を復刊することになりました。今回で二回目の復刊ですから正確には復々刊ということになります。この間の経緯を後々のために書き記しておくことにしましょう。

『願満』はもともと当院初代住職の藤井日静上人が昭和二十六年に創刊し、上人が第八十六世法主として身延へ入山された昭和三十四年まで、毎月一回発行されました。日静上人の身延入山以後、しばらく刊行が途絶えておりましたが、昭和五十四年、当院第二世日光上人が二十年ぶりに年三回の季刊で復刊し、そして日静上人同様、上人が第九十一世法主として身延山へ入山された平成十一年に休刊し、今日に至りました。

日静、日光両上人父子の住職寺の軌跡を見てみますと、大正十二年に日静上人が京都満願寺住職に就任。のち昭和十七年に当身延別院の主管に就任しました。当院は創建からこの時まで任期付きの主管制でした。のち住職制に変わり、日静上人が初代住職となりました。上人の東京移住に伴い、長男日光上人が満願寺住職に就任。次に、日静上人が身延山へ上がられると、日光上人がその後を襲って当院の第二世に就任しました。この後、日光上人は日静上人遷化の二年後の昭和四十八年、能登滝谷妙成寺に入山し、さらに平成二年、身延山総務に就任。平成五年に私が当院の第三世を継ぎました。のち日光上人は平成十一年に法主に就任し、昨年九月遷化されました。このように『願満』刊行の歴史は、当院歴代住職の歴史でもあります。休刊以来八年、第三世の私の代になって、さいわいに強力な助力者を得て、今、三たび刊行に漕ぎだそうとしております。仏縁による不思議な巡り合わせというほかはありません。

さて、「願満」とは「願」が満ちることですが、「願」にも大小さまざまな願があります。日蓮大聖人は『開目鈔』で、「我、日本の柱とならむ、我、日本の眼目とならむ、我、日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。」と仰せです。ご自身は佐

渡流罪中の身でありながら、日本国とそこに住むすべての人々の救済のために願を立てられたのです。なんと広大な願でありましよう。

ふだん私たちが勤行や法要の最後に唱える文に「四弘誓願」というものがあります。宗派によって字句が小異しますが、我が宗では「衆生無辺誓願度、煩惱無数誓願断、法門无尽誓願知、仏道無上誓願成」といい、一、衆生の数に限りはないが、必ずすべてを救済しよう、二、煩惱の数は無数だが、必ずこれを断じ尽くそう、三、法門は尽きることがないが、必ずこれを知り尽くそう、四、仏道は無上である、これを必ずや完成しよう、というものです。この四弘誓願は、菩薩が最初に発心した時に立てる誓願です。誓願はサンスクリット語でプラニダーナと言いますが、もともと「前もつてする」「前に置く」などの意味を持つ動詞から派生した言葉です。菩薩は菩薩の道を歩き始める前に誓願を立てるのです。日蓮大聖人の『開目鈔』の言葉は、大聖人が法華の菩薩であり、その行いが菩薩行であることの発露にほかなりません。自分や自分の身の周りの幸福を願うのではなく、すべての人の幸福を願う、こういうことは容易にできることではありませんが、私たちは常に大きな願を持つことを心懸けましょう。そして自分の行いをいつも見直しましょう。自分の立てた願にもとることをしていないか、ご先祖に対して恥ずかしくないか、大聖人、お釈迦様の前に素直に手を合わせられるか、と。常に自分を見直すことによって、私たちは少しずつ変わることができます。

『願満』の題字は、日静上人が創刊時に用いた字を踏襲しました。本誌が皆様のお役に立てるような内容を載せ、寺と檀信徒の皆様とを繋ぐ架け橋となることを願って復々刊の言葉とします。



第一回 千葉・誕生寺

お題目の文字に感動

私が初めて御首題をいただいたのは、大本山の誕生寺を訪れたときでした。私の友人で、お寺や神社を参拝しては御朱印を頂戴しているという男がいて、その彼に勧められたのがきっかけです。

「御朱印なんて、スタンプみたいなものでしょ。そんなもの集めて、どこが楽しいのかなあ」

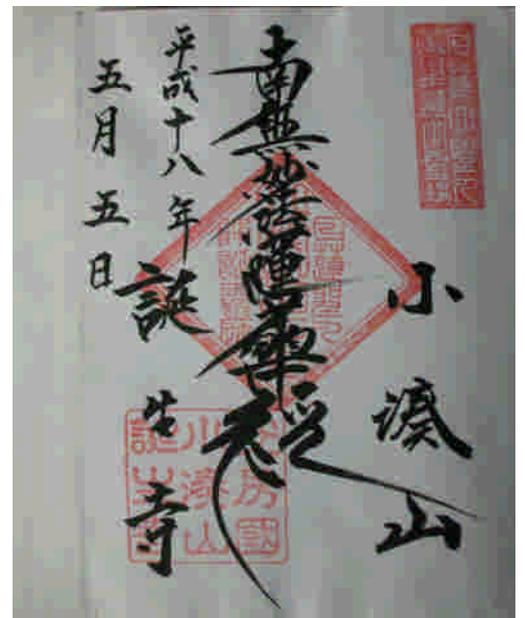
私は、友人の趣味に対して最初はそんなふうに思っていました。その友人は「旅の記念になるし、とても充実した気持ちになれるんだよ」などと話します。

昨年五月五日、私が南房総方面を一人でドライブしていた時のことです。「このあたりでは有名な観光ポイント」くらいのつもりで、たまたま誕生寺に立ち寄りしました。受け付けで「御朱印帳」なるものが並べられてい

て、その友人の言葉を思い出したので。「この御朱印帳をください。御朱印もお願います」。すると、受け付けにいた僧侶の方がしつかりと時間をかけ、「南無妙法蓮華經」と墨書してくれるではありませんか。その上で、朱の印をこれまた時間をかけて押してくれました。私が当初イメージしていたスタンプラリーのスタンプとは全く違った印象です。



誕生寺の山門には「日蓮大聖人御降誕 800年に向かったの祈り」と掲げられていた



しかも文字は「法」を除いて、光が差し込むように伸びています。「この南無妙法蓮華經の文字には、どんな秘密が隠されているのだろう? 日蓮宗のお寺では、どこのお寺でもこの文字をこんなふう書いてくれるのだろうか?」私のアタマの中に、興味・関心がどんどん湧き上がりました(日蓮宗のお寺の場合、「御朱印」とは言わず、「御首題」と呼ぶことを、その後、知りました)。それは、私が「御首題をいただく旅」を始める大きなきっかけでした。

大本山・誕生寺は日蓮聖人御降誕の地。私がいまさらここに紹介するまでもないでしょう。平成三十三年(二〇二一年)二月十六日の御生誕八百年に向かって、お寺では着々と準備が進められているように感じました。

(平山 徹・新聞記者)

寺の動き

身延別院二世・身延山第九十一世 妙道院日光上人 第一周忌法要

身延別院先代住職で身延山久遠寺第九十一世法主、藤井日光上人の一周忌法要が八月二十五日、当院で開かれました。導師は東京・堀之内の本山妙法寺の嶋田日新山主が勤め、法縁関係者や東京都東部宗務所管内寺院、当院の総代や世話人、檀信徒ら計約百五十人が参列しました。法要は井上瑞雄身延山総務をはじめ、千葉県勝浦市興津・本山妙覚寺の堀水教進貫首、同県茂原市・本山藻原寺の持田日勇貫首らが焼香されました。

この後、都内の箱崎ロイヤルパークホテルに会場を移して献花式が行われ、法縁を代表して嶋田山主が「日光上人が発願した身延山の五重塔再建は、着々と工事が進んでいます。その完成を霊山浄土で心待ちにしていることと推察致します」と挨拶されました。

身延山お会式団体参拝

身延山久遠寺のお会式が十月十二、十三日に営まれ、身延別院から藤井教公住職、河野信成



身延山久遠寺のお会式
檀信徒によって勇壮にまといが振られた

師、檀信徒の皆さん計九人が団体参拝しました。一行は十二日午前十一時半に小伝馬町の身延別院を乗用車二台に分乗して出発。久遠寺には午後三時に到着。午後六時から祖師堂で営まれたお逮夜法要に参列しました。境内は万灯が飾られるなど華やかな雰囲気。まといを振る檀信徒の姿があちこちで見られ、夜遅くまで多くの参詣者でにぎわっていました。身延別院の一行は、西谷にある岸之坊に宿泊し、翌十三日は朝のお勤めに参列しました。朝食後、御廟や奥の院を参拝し、午後一時半に久遠寺を後にしました。

お会式の花づくり奉仕

身延別院の檀信徒の皆さんが十月十九、二十日、お会式に用いる紙の花づくりに取り組みました。お会式で紙の花を飾るのは、日蓮聖人が池上宗仲氏の館で御入滅なされた時、大地が鳴動し、館の庭先の桜の木が時ならぬ花を咲かせたという言い伝えにちなむものです。

花づくりは身延別院地下ホールで行われ、折りたたまれたピンクと白の薄紙を檀信徒の皆さんが一つ一つ丁寧に花の形に広げていきました。その数およそ二千個。出来上がった花は、桜の枝に見立てた竹と万灯にゆわえつけました。花づくり奉仕に参加いただいたのは以下の皆さんです。

林好江、阿久津喜美子、寺久保トシ子、石田光子、石渡日出子、永谷きみ子、黒石鈴子、埴多賀子、西原妙子、小林克三、小林聰子、龍佑企子、龍憲吾、北村孝子、糸野千代子、佐竹美智子、岡田泰蔵、三和家政婦紹介所、ケアネット三和、(有)三京、工藤祐子(敬称略)。
本当にありがとうございました。



身延別院青年会が発足

身延別院の青年会が今年六月に発足しました。檀信徒の息子さん、娘さん、有志の若手信徒で構成され、現在の会員は十一人となりました。身延別院で月一回の例会を開き、「無償の社会貢献」を合言葉に、何が出来るのか意見交流を重ねています。

これまでに、片親しかいない子どもたちの手助けとして、子どもたちとのふれあいの機会を検討しています。

青年会は昭和三十年代半ばから四十年代半ばにかけて活動していた経緯があり、五十人以上の会員を誇ったこともあったようです。

復活した青年会では新しい仲間を募集しています。関心のある方はどうぞ御参加ください。

河野師が中山法華経寺荒行堂へ

当院の河野信成師が十一月三日、大本山中山



河野師と父 河野清光世話人
(中山法華経寺で)

法華経寺の百日荒行に入りました。全国から集まった僧侶とともに、来年二月十日までの百日間、一日二時間の睡眠と粗衣粗食に耐えながら、修行に明け暮れます。

この日、中山法華経寺の荒行堂前広場は、早朝から僧侶の家族、それぞれの寺院の檀信徒が見送りに詰めかけ、張りつめた空気が漂いました。河野師はやや緊張した面持ちで、身延別院の檀信徒や親族に見守られながら、入行会法要に臨み、聖俗の境とされる瑞門に姿を消しました。

全国から集まった僧侶は百五十人。このうち初参加(初行)の僧侶は五十七人でした。

今後の予定

十二月一日(土)

願満祖師お開帳

十二月十五日(土)

十三日講

平成二十年

一月一日(火)～三日(木)

新年祈禱会

二月三日(日)

節分会追儺式



編集後記

復々刊『願満』を二十年ぶりに刊行することになりました。近いうちに必ずとは思っていましたが、日々の用事に追われてなかなか手が出せずにおりました。そこへ強力な助っ人二人が現れ、思いがけなく今日の運びとなりました。

一人は、今回の誌面で、「御首題をいただく旅」の記事を書いて下さった新聞社にお勤めの平山徹さん、記事作成やその割り付け、アイデアなど全面的にお世話になりました。もう一人は、今春、北大大学院の修士課程を修了して東京でOLをしている上野蘭子さん、住職の教え子の一人で、コンピュータに詳しく編集作業をお願いしました。これからもお手伝いいただけるものと期待しています。

別院も昨年、先代日光上人の遷化に遇うなどいろいろ大きな変化がありました。今年に入っては副住職を中心に身延別院青年会の復活、光師の一周忌、稚児行列の復活、近くは河野師の荒行堂入行など、日々新たな出来事が起こります。このような別院の様子や宗門のこと、日々の信仰に関わることなどを、年三回の季刊ではありますが檀信徒の皆様にお伝えして、寺と皆様との関係がより緊密になるよう期待しています。